全力結集

全力結集で挑戦し、未来を創る

地域の生産性向上の取り組み

JA全農グループでは、地域全体の生産性向上を目標に、各地で特色ある事業を展開しています。今回は、北九州と西日本地域の取り組みを紹介します。

ジェイエイ北九州くみあい飼料株式会社

農場衛生検査を活用した生産性向上について

ジェイエイ北九州くみあい飼料株式会社は、養豚場の生産性向上を支援するため、さまざまな取り組みを行っています。特に力を入れているのが、全農家畜衛生研究所クリニックセンター九州分室及び、JA等関係機関と連携した農場衛生検査の普及推進です。

当社管内の養豚場で、離乳舎での事故率が増加したケースでは、子豚の増体が悪く、背骨が浮き出る個体がいました。ほかにも、被毛が粗く、呼吸器疾患の症状などが見られました。農場では逆性石鹸を用いた消毒を積極的に行いましたが効果は薄く、子豚事故の原因が分からないまま肉豚出荷頭数が減少していました。

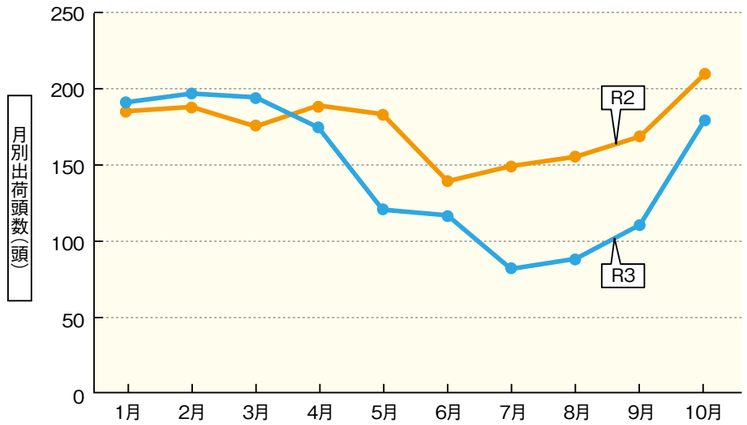
相談を受け、当社からは農場に衛生検査の実施を提案しました。衛生検査は獣医師の協力のもと採血・採糞・鼻汁採取等を行い、発生している疾病を特定するためのものです。検査結果から、養豚場でサーコウイルスが蔓延しているということが判明しました。農場では定期的にワクチンを接種していたものの、接種時期が遅いために感染が拡大していました。

検査結果を基にした対応で事故率減少に導く

農場は検査結果を受けてワクチンの早期接種を実施。また、疾病対策として使用していた逆性石鹸はサーコウイルスには効果がないため、消毒薬も変更しました。衛生検査を実施して適切な疾病対策をとった結果、子豚事故率は減少しました。肉豚在庫数も増加し、前年実績を下回っていた月別出荷頭数が現在では大きく回復しています（図1）。

今回のような事故原因を探るための衛生検査以外に、農場衛生プログラムの見直しを目的とした検査も推進しています。管内でも何年も同じ衛生プログラムをしており、生産性が低下している農場が少なくありません。管内養豚農家の生産性向上のため、関係機関と連携した支援に引き続き取り組んでいきます。

図1．該当農場における令和2年及び令和3年の月別肉豚出荷頭数



JA西日本くみあい飼料株式会社

生産性向上のためにコンサルらが農場巡回

JA西日本くみあい飼料株式会社は、酪農家の生産性向上のため、関係団体と協力した取り組みを継続して行っており、その中の1つを紹介します。JA京都酪農部会には40戸の酪農家が所属しています。より高いレベルでの生産指導や生産者同士の情報交換、他生産者との目合わせ等を目的として、JA京都酪農部会が主催となり、牛舎内で実際に牛を見ながら飼養管理について検討する「バーンミーティング」や「農場指導巡回」を年1回行っています。

この取り組みは生産者の要望から始まり、今年で14年目になります。北海道で酪農コンサルティングをされている安藤道雄コンサルタントにお越しいただき、生産者、JA、家畜保健衛生所、酪農ヘルパー、JA西日本くみあい飼料が一緒になって各生産者の農場を巡回します。1戸あたりの時間はおよそ1時間半、3日間かけて7戸程度の生産者を訪問します。

日頃からデータを共有し生産農家を的確にフォロー

安藤コンサルとは日頃から牛群検定データやバルク乳成分検査結果を共有しており、この情報を基に、生産者のフォローをしていただいています。JA西日本くみあい飼料は、生産者が使用している牧草・自給飼料の分析や、生産者の現状を定期的に安藤コンサルに報告するとともに、生産者に飼料を提案する際は、事前に相談し、提案内容についてアドバイスをいただいています。

巡回では、飼養管理のアドバイスをはじめ、飼料情勢、ストールサイズや換気扇の設置場所等の牛舎構造について議論します。今年度の巡回では、「冬場の栄養管理」、「乾乳期でのケアの仕方」等について重点的に意見交換しました。そのほか、粗飼料不足の情勢から、稲発酵粗飼料（WCS）に関する話題も出ました。巡回で訪れた農場を管理している生産者はもちろん、同行している関係者からも積極的な意見が出ます。当事者だけではなく、他の生産者も共通の問題意識を持つことで、地域全体のレベルを底上げする取り組みになっています。

情勢が不安定な時期だからこそ、関係者が一体感を持って共通の課題に取り組む重要性が増しています。JA西日本くみあい飼料は、継続してこの取り組みをサポートしていきたいと考えています。

写真1．安藤コンサル（右から2人目）とともに行った「バーンミーティング」の様子

写真2．積極的に意見を述べ合う参加者